
ただ、それだけを知りたい

カーテンコール

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ただ、それだけを知りたい

【Nコード】

N4776Z

【作者名】

カーテンコール

【あらすじ】

土砂崩れで死んだ、1人の青年。異世界へと生まれ変わった彼であるが、再び与えられたその命には、大きな制限が掛けられていた。運命に翻弄される彼に、果たして『救い』はあるのだろうか……。

終わらない、絶望への序曲

人は、桜が如く。

ただひと時咲いては散り、後に残るは醜い枯れ木のみ。

……これは一体、誰の言葉だったろうか。

「最悪、だな」

過剰なほどに整備された白い建物を見上げながら、そんな台詞が口を衝いて出た。

こんなに気分が悪いのは、生まれ変わった初日と『あの日』以来。

……俺は、死人だ。正確には、1度死んで再び生まれた身だ。

輪廻転生。元は仏教だか密教だかの用語らしいけど、生憎俺は前世も現世も無神論者だから、詳しくは知らない。

けどとにかく、その転生とやらを経た人間であることは間違いないと思っている。

忘れもしない。あの日、土砂崩れに巻き込まれて死んだ前世。

それから碌な間さえ置かず、再び赤ん坊になった。

「あれから、15年と少々」

容姿も変わった。

在り方も変わった。

変わらなかったものなんて、見付かりそうにないくらい変わった。

俺も……世界も。

「インフィニット・ストラトス……」

通称ISとも呼ばれる、大気圏外長期活動用マルチフォーム・ス
ーツ。

……などとは名ばかりの、危険極まりない兵器。その圧倒的技術

力により作られた、云わば時代を先取りしすぎた存在。

そして俺の、全てを狂わせた災厄^{モノ}。

「ちいっ」

舌打ちのひとつもしたくなる。

ISさえ無ければ、俺のこの第2の人生が狂う事は無かった。

神など信じていないこの身だけれど、もし居るとするなら住処まで乗り込んで、殺してやりたい。

ややこしい真似をしてくれた、死んで詫びろと声高に叫びたい。

お陰で俺は——否。

居もしない存在に文句を言ったところで、壁に怒鳴るのと同じだ。

そんな無駄な事、してもしょうがない。

結局のところ、俺のこの非力な腕では何も出来ないのだから。

「……………」

分かり切っている。

俺に出来る事なんて、何も無いってぐらい。

「……………時間だ」

腕時計の短針が、そろそろ8を刻もうとしていた。

もう行かないと——初授業に遅れてしまう。

俺はひとつため息を吐いて。

先程から見上げていた建物……『IS学園』に向けて、足を踏み出した。

「最悪、だな」

最後にもう1度、同じ言葉を呟いて。

本当の『3人目』

6月終盤。

ここISS学園では中止という形にしろ、つい先日大きなイベントであった学年別トーナメントも終わり、更に1年生は臨海学校が目と鼻の先となった時節。

しかして今日この日は、何事も無く過ぎ去るごく普通の日。

その筈だった。

「転校生？ また？」

1年1組の教室。

そこで俺は、何故か待ち構えていた鈴に捕まり、『転校生』の話題を聞かされていた。

「そうよ。うちのクラスがその話題で持ち切りで、うるさいから逃げてきちゃった」

「フン、白々しい……」

何故か不機嫌な筈。一体どうした、カルシウム不足か？

煮干し食え。

「……一夏。何か今失礼なことを考えなかったか？」

「いやそんなまさか」

危ねえ。心を読まれた。

「けど、やっぱり1組なのかな？」

そう言ったのは、つい先日『シャルル』から『シャルロット』として再転入した友人。

鈴の話からすると、そうらしい。また山田先生の睡眠時間が削られそうだ。

「しかし、転校生か。もしかして男だったりしてな」

「それこそ有り得んだろう。男のIS操縦者は、お前と……」

ちらと、教室の一角を一瞥する筈。

そこには、ラウラとセシリアを相手に話しかけているもう一人の『男子生徒』が居た。

「あの下衆だけだ」

「下衆って……そりゃ言い過ぎだぞ筈」

「あのような輩、下衆で十分だ。見られるだけで虫唾が走る」

ブイツと顔を背ける筈。余程あいつが嫌いらしい。

筈だけじゃない。鈴は頷いて肯定してるし、シャルロットも苦笑

はすれど否定はしない。

……ついでに言えば、あいつに話しかけられてるラウラやセシリアも、思いつきり不機嫌を露わにしてる。

それでも必死になって話しかけてるあいつが、何だか可哀想になってきた。

よし。ここはクラスメイトにして唯一の同性である俺が、さりげないフォローを――

「お前達！ ホールルームだ、さっさと席に着け！」

しようと思ったところで、千冬姉が出席薄片手に教室に入ってきた。すまん、無理だった。

刹那、イグニッション・ブースト『瞬時加速』さながらの速さで席に戻るクラスメイト達。すげえ。

鈴も以前の恐怖からか、いつの間にか消えてた。

「ふん、やればできるじゃないか。では山田先生、頼んだ」

「……あ、はい……分かりましたあ……」

いつものようにボタンタッチされた山田先生から、いつもと違っ

て魂が抜けていた。やっぱり睡眠時間削られてたらしい。

「ええっと……知ってる人はもう知ってると思いますけど……ホー
ムルームの前に、転校生を紹介したいと思います……もうほんと勘
弁してください、私の睡眠時間が、ああああ……」

今にも処理落ちしそつだ。惨い。

「転校生だと!?!」

バン、と立ち上がる音。

振り返ったら、後ろの席であいつ……銀崎^{ぎんざき}が驚いた風に山田先生
を見てた。

てか、あいつ知らなかったんだ。

ラウラとシャルロット、それに鈴の時は凄く詳しく知ってたから、
そういった情報に関しては通だと思ってたけど。

「席に着け、銀崎」

「っと……すみません、織斑先生」

千冬姉に睨まれて、座り直す銀崎。

けどその顔には、未だ疑問の表情がありありと出ていた。

「（しかし本当に1組だったな。もう今更だけど、本当に分散させていないでいいのか？）」

至極まっとうな事を考えていたら、教室の扉が開かれた。

あれ、何かこのパターン前にもあった気がする。

「……………」

無言の入場。あ、これも前にあったパターンだ。

よし、『P・^{パターン}ラウラ』と名付けよう。今決めた。

うんうん、俺って結構センスあるんじゃないか？

「……………」

そんな下らない事を考えていたら、ふと教室のざわめきが消えている事に気付いた。

何だ？ 今度は『P・シャルル』か？

「……………へ？」

考えながら、転校生の姿を見遣って。

思わず声が出た。

ざわめきが収まる訳だ。何故なら。

その転校生が——俺が半ば冗談で言った通り、『男』だったのだから。

2人の転生者

さて。俺は今、ひっじょーに困惑している。

え？ 俺は誰かつて？

そんな！ この俺、銀崎飛竜ひりゅうを知らない！？ 寄る年波の所為でボケた神様に間違つて殺され、その侘びとしてここ『インフィニット・ストラトス』の世界に転生させて貰つて、ヒロイン達で構成したハーレムを築く為に日々奮闘しているこの俺を！

……どうにもフラグ立てが難航してて、未だ1人も落とせてないけど。

箒や鈴はまあ仕方ないにしても、他の3人はいけると思ったのに。原作ではどうなるにしろ、少なくとも最初の条件は一夏の野郎とイーブンだったんだから。

けど実際は、クラス代表決定戦では一夏と違って俺は専用機到着が間に合わず、結果セシリアと戦う事無く棄権。一夏にまんまとフ

ラグを盗られた。

シャルロットとラウラの時だって、何故かいいタイミングで必ず何らかの邪魔が入って撃沈。これが原作の修正力ってやつか！？

だが俺は諦めない！ 元はライトノベルだろうとここは現実、アピールを続ければきつといつかは報われる筈だ！

もつとも彼女達からすれば、同性ゆえに一夏が気安く接してくれる俺は、云わば邪魔な存在らしくて邪険に扱われる事もしばしばだけど。

ああいや、それとも気を引こうと色々やったのが問題だったんだろつか……悩む。

おまけで神様から頭脳や運動神経、それに一夏級のイケメンフェイスを貰ったから、見てくれとかが原因とは思えないが。

……まあいいさ！ 学生生活は始まったばかり、まだまだチャンスはてんこ盛りだ！

それに例え、今の5人が駄目だったとしても。まだ生徒会長の更識楯無に妹の簪、臨海学校で出会うナターシャさんとか、美人は山ほど居るし！

ちなみに更識姉妹とはまだ接触してない。楯無先輩は迂闊にこちらから接触したら怪しまれかねないし、簪の方は純粹に見当たらない。

4組も整備室も結構風漬しに探してんのに、なんで？ いつも行

った時居ないんだよな。

仕方ないから、気長に向こうからアクション起こすのを待ってる。

……俺の現状はこれぐらいでいいか。それより今は緊急事態だ。

「では……自己紹介を、お願いしますう……」

静まり返った教室、電子パネルの前に立つ男。

そう、『男』なのだ。

ラウラよりも長い、腰どころか膝まで伸びた赤髪。

若干吊り上った双眸に収められた、無機質染みた黒い瞳。

ほっそりとした整った顔立ちに、右眼の下から頬にかけて、ムカデのようなタトゥーが刻まれてる。

普通だったらあいたたたーなその装飾が、とんでもなく様になってた。

全体的に細身だが、軟弱さや貧弱さがまるで感じられない。

そして極めつけは、着ているその学生服。

IS学園の男子制服は、一夏や俺が着ている襟元だけ黒く、全体が白の配色がベースだ。

けど赤い髪の男はそれが逆転してて、襟元だけ白く全体が黒の制服姿。

なんかこう、ダークヒーローっぽくてカッコいい。是非真似してえ。

けど簪が好きそうじゃないなあれ、止めた。

「……………」

とにかく、バカみたいな美形。

あんな見てくれ自然発生するわけねえ。どう見ても俺と同じ『転生者』だ。

「そつだ、そつに決まってる……………」

「私語は慎め銀崎」

バゴス！

「ぐへらっ！？」

織斑先生に出席簿で殴られた！ 滅茶痛え！

……と、とにかくだ。あいつが転生者ならば、これから先俺のハーレムを築く障害になりかねない。

ただでさえ難航してるつてのに、これ以上敵が増えるなんて御免だ！

……………ここは一発睨みを利かせておくか。

喰らえドラゴンアイ！！ 飛竜だけに！！（ただのガン飛ばし）

「……………」

気付かれさえしなかった。泣きてえ。

つつかこの野郎、何で目にハイライトが無いんだよ！ その所為で何見てんのかさっぱり分かんねえよ！

ああ遣り辛い！ てかいいい加減なんか喋れよ！ 「またですか？」って、山田先生泣きそうになってんじゃん！ 泣いてても可愛いな畜生！

それにラウラが「何か転校初日の私を思い出す、鬱だ……」とか落ち込んでるじゃねえか！ 俺の未来のハーレム要員に何しやがる！！（現在好感度最低）

これからこのクラスの一員としてやっていく気あんのか？ 無い

なら無いで俺は助かるが。

「……………ふう」

……………お？　ようやく口を開けたぞ。

さあどうなんだ。フレンドリーにするのかしないのか！

「……………」

口を開けて、少々の間を置いて。

紡がれた言葉を聞いて、俺は心底安堵した。

「……………雌臭い……………最悪、だな」

ああ。こいつクラスに馴染む気、全く無いや。

気分次第のコイントス

「……………雌臭い……………最悪、だな」

教室に入った最初の感想としては、これが最も適切だろう。

一瞬前と比較してあからさまに空気が凍りついたが、別に気にするような事じゃない。

「複数の香水やらコロンやらが混ざり合って、花が腐ったような酷い臭いだ。これが普通だと言うのなら、俺は明日からガスマスクを持つてくる必要がある」

「……………ふ、ふええ……………」

俺の横に居る背の低い副担任……………確か山田。

そいつが何か言いたげに涙目で俺を見ているが、生憎発言を改める気は無い。

黒髪の担任は、今のところノータッチを決め込んでいるみたいだしな。

「ああ済まない、自己紹介だったか？　だがしかし、ただクラスが同じだけの腐臭を放っている輩どもに、果たして名前を教えてやる必要があるのだろうか」

「何という暴君、ラウラより酷い」

「銀崎！　私と比べるな！」

教室の後方に居た男のぼやきに、眼帯を付けた銀髪のチビが怒鳴る。

……何で小学生が混ざってるんだ？　飛び級スキップにしても幼過ぎる気がするが。

「銀崎、ボーデヴィツヒ、黙れ。それとお前も、自己紹介ぐらいまともにやれ」

流石に目に余ったらしく、黒髪の担任から咎められた。

けれど足りない。まだ俺の人格を知らしめさせるには、少しばかり

り。

「ふん……自己紹介、自己紹介ね」

やる意味は無いが、やらない理由も無い。

そしてやらなければ、いい加減横の副担任が泣きそつだ。

仕方ない。いつものアレで決めよう。

「こいつが表なら、やるとしよう」

ポケットから出したのは、愛用のコイン。

親指に挟んで、弾いた。

くるくると回り、落ちてきたところをキャッチする。

手の甲と掌で挟まれたそれを――

「……………っ」

祈るような目で見てゐる山田が居た。

バカなのかこいつ。必死過ぎるだろう。

担任の方は、やはりノータッチだ。

山田に任せてるのかどうか知らないが、少しは助けてやったらどうだ？

原因である俺が言えた義理ではないが。

「……………ちっ」

どうでもいい事を考えつつコインを見てみれば、表。

これで俺は、自己紹介する事を余儀なくされたわけだ。

「ふん、運が良かったな」

「はふう……………」

安堵する山田。小動物か。

ポケットにコインを戻し、改めて教室を見据える。

……………とは言えど、俺の駄視力では精々人数ぐらいしか把握出来んが。

「担任。自己紹介とは名前だけでいいのか？」

「目上には敬語を使い……散々待たせたんだ、好き嫌いや特技も言え」

「自分勝手だな。まあいい」

よく見えはしないが、恐らく教室内の殆どが「お前が言うな」と思っているのだろう。

俺の最初の発言からして、歓迎ムードとは程遠い空気だしな。

「久々^{くぐ}津・オテサーネクだ。好きなものは無い、嫌いなものはたつた今からお前達だ。特技は絵」

我ながら何とも投げ遣りだな。

当然誰も何も言わない。異質にして異物な俺に対して、持ち得る感情を見失っていると言ったところか。

だがこれでいい、これで。

「で、副担任。俺の席はどこでしょうかね」

「……………あ、ふえ、はいっ！ あ、あああそこですっ！」

言葉を失っていた山田が、慌てたように教室の隅を指す。

無言の室内を歩き、俺は席へと向かった。

「な、なんなのあの人……」

「怖いよ……」

ぼそぼそと聞こえてくる囁き。

どれも、俺に対して否定的なものばかり。

「（そうだ、これでいい）」

これで――

誰も俺に、近付かない。

嫌われ者の赤松

「何なのだあの男は！」

食堂のテーブルを叩き、憤慨する篤。

おい止めるよ、壊れるって。

「全くですわ！ 当然のように無礼を振る舞うあの姿勢、気に入りません！」

「転校当初の私はあれに近い感じだったのか……凹むぞ」

「あ、あはは……」

セシリアは篤に全面同意、ラウラは少なからず自分の行いを思い返して落ち込みモード。

例によって、シャルロットは苦笑気味だ。

「そんなに酷いわけ？」

「そりゃあもう。朝の自己紹介以降全然喋らないし、誰とも目さえ合わせようとしない。山田先生最後の方泣いてたよ」

「あんたには聞いてないのよ銀崎」

「酷い！　せつかく教えてあげたのに！」

唯一クラスが違う鈴の質問に答えたのは、俺が昼食に誘った銀崎。

鈴、確かにそれは酷いぞ。

銀崎は結構いい奴なのに……たまにおかしなこと言うけど。

「……し、しかも泣いてる山田先生に向かって何て言ったと思う！
？　「ぴいぴい泣くな駄メガネ、鬱陶しい」だよ！？」

「しつこいわねあんたも……けど、確かに引くわその言い草」

「流石にそのあと千冬姉に叩かれたけどな。山田先生が可哀想だったよ」

「その様を見て、あいつはあろう事か薄らと笑っていた。最低の男だ」

篝のひと言に、うんと頷く皆。

……確かに久々津の行いは行き過ぎてる。けど俺としては折角の
数少ない男子なんだから、できる事なら仲良くしたい。

そしてその為には、あいつがちゃんとクラスに打ち解けなくちゃ
ならない。

「織斑。あのムカデ野郎と仲良くなんて無理だと思うぜ」

「休み時間の度にどっか行っちゃまうから、話し合っにも切っ掛けが
……って、銀崎？ 俺口に出してた？」

「顔に出てた」

何てこった。だから千冬姉にも心が読まれるのか。

ポーカrfフェイスの練習した方がいいか？

「向いてないから止めとけ」

「学校唯一の男友達が冷たい……」

銀崎って時々辛辣じゃないか？ 主に俺に。

そう思ってたら。

「「「「「……………」」」」」

「ひいっ！ ご、ごめんなさい！！」

何故か銀崎が皆に睨まれてた。

あろう事がシャルロットにまで。どうしたんだ。

「くっ、この気安さ…………」

「羨ましいですわ…………」

「むう…………」

「ある意味1番の敵よね…………」

「やはり消すか…………」

「ひいっ！ すみません消さないで下さい！」

「ラウラぁッ！？ ナイフ仕舞え！」

何故か危うく友達を1人亡くすところだった。

ラウラの考えてる事は、相変わらずさっぱり分かん。

……他の奴なら分かるのか、と言われても困るけど。

「ところで一夏、『ムカデ野郎』ってなに？」

「え？」

ああそうか。鈴だけクラスが違うから知らないのか。

「転校して30分でクラスに定着した久々津の渾名だ。右目の下に
ムカデ
蚣のタトウーしてるから」

「蚣？」

「そう！ それがムカつくぐらい様になってるのなんのって……爆
発しろ！」

「あ、あはは……銀崎君、そこまで言わなくても……」

人の良いシャルロットが、まあまあと銀崎を宥めてた。

……それにしても、やっぱり『シャルロット』って少し長いよな。
それに折角の呼び名が普通になっちゃったし、何か呼びやすい渾名
でも考えようか……？

まあ、それに関して今はいいとして――

「それにしても、蛸ね……あ、それってあんな感じの?」

「うん?」

鈴が指差した先を向いてみる。

そこには。

「……………」

「……………」
「なあっ!?!」
「……………」

何時の間にか、俺達と同じ席でロールパンを食べてる久々津が!

俺を含めた鈴以外の全員が、同時に声を上げた。

「き、ききき貴様!?! 何時からそこに!」

「さっきから居た。他に席が空いてなかったからな」

「え? 本人?」

ラウラの問いに、淡々と答える久々津。

と言いかもしかして、今までの会話全部聞かれてたのか!?

「……お前達が、俺に対して何を思おうが勝手だがな」

聞かれてたよ! き、気まずい……。

「ひとつだけ、言うておく」

そう言つと、久々津はロールパンを飲み込んで、ゆらりと席を立った。

そして無機質な黒い眼で、俺達をゆっくりと見回して――

「^{これ}タトウーは、アカムカデだ」

頬の蚣をひと撫でして。

ぼそりと呟き、行ってしまった。

いや。確かに赤いけれども。

「一夏……俺、あいつのキャラが分からなくなった」

「奇遇だな銀崎……俺もだ」

けど、なんか……やっぱり根っこから悪い奴だとは思えないんだ
よな……。

オリジナルキャラクター紹介（前書き）

銀「つーわけで、オリキャラ紹介だ！」

久「……何故俺まで」

？「諦めなさい。面倒なのは理解しているけれど、これも主の定め
た事」

銀「へ？ あんた誰？」

カ「私の名前はカーテンコール。神の代行者」

銀「神ってあのボケ爺さんかよ。こんな美人の秘書が居たんなら紹
介して欲しかった」

久「神など居ない……下らん」

カ「そう思うのはあなたの勝手。けれど私がどう名乗るかも私の勝
手。……違って？」

久「……好きにすればいい」

カ「聞き分けの良い子は好き。あなたのような暗い目をした子は特
に」

久「……お前。俺をどこまで知っている」

カ「すべてよ。可哀想なキメラの子」

久「……………」

銀「なんか前書きにあるまじきシリアスなんだけど……………」

オリジナルキャラクター紹介

名前：久々津・オテサーネク

年齢：15歳（生年月日不明）

身長：175センチ

体重：54キロ

血液型：A B

容姿：膝まで伸ばした血のように赤い髪、光の無い無機質な黒い瞳を持つ。一切の贅肉と無駄な筋肉を削ぎ落とした、柳のような体つき。右目の下に、赤で彩られた蛇のタトゥーを刻んでいる。

出身：不明

帰属国家：無し

転生者。出鱈目な履歴で過去の全てを覆い隠された、正体不明の

人物。他人を寄せ付けず、意図的な言動で人を突き放している。世間的には『世界で3番目の男性IS操縦者』とされているが、その不透明な出自から、専用機を与えられている他2名とは異なり、叛逆の恐れありとしてISに搭乗することを許されていない。生体データを取る為の保護という形で学園に通わされているので、授業への出席は義務付けられていない。又、学園の外へ出る事も不許可となっている。

IS適性はC。

イメージCV：関俊彦

（最遊記RELOAD「玄奘三蔵」

機動戦士ガンダムSEED「ラウ・ル・クルーゼ」など）

イメージソング：『Over the clouds』

（『GOD EATER』OP）

名前：銀崎飛竜
（ぎんざきとゆう）

年齢：16歳（4月30日生まれ）

身長：172センチ

体重：60キロ

血液型：O

容姿：茶色の短髪に赤い瞳のイケメン。中肉中背だがしっかりと筋肉は付いている。

出身：日本

帰属国家：日本

『世界で2番目の男性IS操縦者』にして、神の手による転生者原作キャラクターによるハーレムを目指しているが、いかんせん間が悪く空回りしている。一夏とは友好的な関係を築いており、それが彼女達との溝を深めていたり。悪い人間ではないのだが、その生来の在り方からか3枚目と称されており、女子生徒達からの評価は「友達にはいいけど恋人にはちょっと……」らしい。

母の勤め先である、とあるIS企業にテストパイロットとして所属している。実はラウラより強い。

IS適性はS。

専用機は4脚型IS『牙神』。

イメージCV：森田成一

(BLEACH「黒崎一護」

戦国BASARA「前田慶次」など)

イメージソング：『BRAND NEW WORLD』
『ONE PIECE』OP

オリジナルキャラクター紹介（後書き）

銀「……なんか、俺とムカデ野郎とで紹介文の温度差がすごい違うんですけど」

久「知るか」

カ「それもまた定め。世界に与えられた役目の違い」

久「……………俺に、役目など……………」

カ「きつとあるわ。私には、まだ見えないけれど」

久「……………」

カ「迷って。迷子の果てに見つけるものもあるのだから」

銀「俺もこの前道に迷ったら、いい店見つけたぜ！」

久「……………ふん」

カ「愛しい子。抱き締めさせてくれないのが、とても残念」

久「願い下げだ」

銀「はいはい！俺24時間受付中ですから！もうバシバシ来ちゃっていいから！」

カ「ふふ……………ああ、残念。もう時間みたい」

久「……………」

カ「私は、行かないと。また会える事を、切に祈っています」

銀「ちょ、帰る前にハグハグさせてー！」

カ「ポケた神の秘書も、結構辛かったりしますのです」

銀「最後なんかはっちゃけた!？」

久「……………」

銀「ぐおお、行っちゃった……………」

久「……………役目……………か」

静かな初夏

「おはよう、諸君。ホームルームを始める……久々津はどうした？」

「来てませんけど……」

久々津がIS学園に転入して、3日。

初日以降、彼が教室に来る事は無くなっていた。

学園の一角、木々の生い茂る森林地帯。

その中にある開けた空き地の中央、そこに置かれたひとつのベンチ。

まるで隠れ家のような、そんな背景の中で。

「……………」

久々津は1人、絵を描いていた。

ベンチに腰掛け、眼前のキャンバスに筆を走らせる。

彼が描いているのは、いわゆる抽象画と呼ばれる類のもので、それが何を顕わしているのかは定かでない。

意味を知るのは、彼自身のみだった。

「……………そろそろ仕上げか」

呟きながら、キャンバスに色を重ねる。

赤、青、黄、紫、白、黒、緑。

統一性の感じられない彩り。傍から見れば、絵とさえ呼べないような色の羅列。

それでも久々津にしてみれば、しっかりと意味のある配色らしい。時折筆を止め、少しばかり悩むように眉根を寄せていた。

「……………」

……何故彼が、授業にも出ずにこのような事をしているのか。

それは、言ってしまえば簡単な理由である。

久々津には、元々授業への出席義務が無いのだ。

世界で3番目の男性IS操縦者、久々津・オテサーネク。

しかし彼は、その過去があまりにも不透明であった。

戸籍さえ存在しない、何ひとつ身元を明らかにするものを持たない異分子。発見当初はテロリストの疑いさえ掛けられていた。

結局その疑いは杞憂だったのだが、IS学園を擁する日本政府にしてみれば、久々津の存在はいっ爆発するかも分からない爆弾のようなもの。

故に学園へ所属はさせてもISへの搭乗を不許可とし、純粋な生体データのサンプル——悪い言葉で言えば、『実験体』の役目を彼に与えた。

この事は、織斑千冬を始め一般教員には知らされていない。非道

な事であると、承知しているからである。

更に言えば、久々津には外出許可さえ無い。この学園の敷地から出る事も出来ないのだ。

授業の免除は、そのせめてもの代償であつた。

「ん……」

久々津としても、この扱いに不満があるかと問われれば、「ないと素直には言えない。」

けれどここ以外に行くあてがあつた訳でもなく、根なし草のままでいれば男性IS適性者のデータを喉から手が出るほど欲しがっている研究施設等から、延々と逃げ続けなければならない。

それは御免だつた。

「……………」

絵具まみれのキャンバスに、横一線の青が入る。

……居たくてここに居る訳じゃない。

ここに居る事を余儀なくされたのだ。

真綿で首を絞められているようだ、久々津は口の端に冷たい笑みを浮かべる。

ぐちゃぐちゃの絵が、完成した。

「……………寝るか」

キャンバスをそのままに、ベンチの上で横になる。

瞼を閉じながら、ふと思った。

「何でこんなところに、ベンチなんか置いてあるんだ…………？」

ここは学園の敷地内でもかなり隅の方に位置している。

ついでに言えば、辺りには木が立ち並んでおり、外からこの場所が見える事は無い。

久々津のようにたまたま辿り着くか、この場所自体を知っていなければ、決して利用される事は無いだろう。

まるで、そう意図して作ったような場所だった。

「ふん…………まあいいか。日当たりは申し分ないし、何より静かで絵を描くには丁度いい。誰も使っていないのなら、俺が使えばいいだけ

のこと」

下らないと思考を切り、久々津はそつと瞼を閉じる。

そよ風に身を預けた彼が眠りに就くのに、そう時間は必要なかった。

久々津の眠るベンチの背凭れ。

その後ろ側には、隅の方に小さくこう刻まれていた。

『たてなしせんよう』、と。

自由奔放、お姫様

放課後の校舎内。

人気もまばらな廊下の中、積み重なった書類を抱えて運ぶ少女が居た。

「ふう……」

長い髪を三つ編みに結び、眼鏡をかけた姿。

如何にも真面目そうな雰囲気を漂わせている彼女の名は、布仏虚。

このIS学園生徒会の一員にして、とある家の『お手伝い』の役目を担っている。

「まったく、お嬢様にも困ったものだわ……すぐ遊びに行っちゃうんだから。仕事が溜まって泣くのは自分なのに」

書類の束が重いのか、やや覚束ない足取りで歩く虚。

どうでもいいが、名前の読みは『うつほ』である。断じて『ホロウ』では無い。

「本音は居ても仕事にならないし、人手は足りないし……はあ」

ひとつ嘆息した後、虚は重厚な開き戸の前で足を止めた。

『生徒会室』と書かれたその扉を、書類を抱えたまま器用に開ける。

「会長、追加の書類をお持ちしましたよ。今やってる分は終わり——」

室内に入り、そこに居る筈の人物に話しかけて——言い終える前に気付いた。

しんと静まり返った生徒会室、そこには誰も居ない事に。

「会長……お嬢様？」

会長卓には、先程『会長』であり『お嬢様』が泣きながら片付け

ていた書類が、積み上がったまま。

更にその傍らに、書類でないメモ用紙が1枚、ぼつんと置かれていた。

虚は書類を手近な机に乗せると、嫌な予感で震え始めた手を伸ばし、その紙きれを手取る。

『ごめんネ虚ちゃん、てへぺろっ』

「……………ッ」

小筆で書いたであろう達筆。

そのくせ可愛い文面なのが非常に腹立たしい。

最後の『』がどれだけ人の怒りを煽っているか、当の本人は理解しているのだろうか。

ぶるぶると、直前までとは明らかに異なる理由で震える虚。

すうと大きく息を吸い。

びりびりと紙きを破り捨て。

「ゴメンじゃねえよあんのガキイイイイイイイッ！！！！！」

キャラクターを崩壊させ、咆哮した。

「あらららら……やっぱり怒っちゃったわね」

学園中に轟いたであろうその絶叫に些か目を丸くしつつ、音源の校舎を見上げる澄んだ水色の髪をした少女。

その名を更識楯無。このIS学園で『最強』の称号でもある『生徒会長』だ。

「でも私は謝らない！　だってあんな量の書類、絶対片付かないか

ら！そして生徒会室にも戻らない！怒った虚ちゃんが物凄く怖いから！」

ビシッ！と無駄にポーズを決め、かつこ悪い事を堂々と宣言する。
ちょうど通りすぎた下級生の目が、氷よりも冷たかった。

「……さ、逃げましょう。何時までもこんなところに居たら、見付かって殺されちゃうわ」

比喻でも何でもなく、今の虚に捕まれば彼女は殺されるだろう。

取り合えず怒りのほとぼりが冷めるまでは、何処かに身を隠すべきだと楯無は割と真剣に思った。

「部屋には戻れないわね、籠城に向かない構造だし。かと言って余りうるちよろしても、捕まらない保証は無し……」

悩むぐらいなら逃げ出さなければ良かったのだが、それ以上に書類が嫌だった。

やってもやっても沸いて出る。ゴキブリより性質が悪い。

命を賭けてでも、逃げる方がまだマシだったのだ。

あくまで楯無にとっては、だが。

「……うん、やっぱり『あそこ』かしら。虚ちゃんも知らないし、隠れるには——」

『どこだバ会長オオオオオオツ!!!!!!』

本でも投げたのか、生徒会室のガラスが割れた。

楯無の頬から、つうと一筋冷や汗が流れる。

「やっぱり、『てへぺろっ』は余計だったかしら……?。」

逃げた事自体が原因と思われる。

少しばかりの乾いた笑みと共に、楯無は黄昏時の中へと消えて行くのだった……。

銀崎飛竜 専用機紹介（前書き）

銀「よう、何だかあんまり出番のない銀崎飛竜だ」

久「……………」

銀「相変わらず不愛想なムカデ野郎だぜ。で、美人秘書のカーテンコールさんは？」

久「……今回は居ないそうだ」

銀「えええええっ！？ そんな、こちとらあの人だけが楽しみでこんな前書きくんだりまで出張して来たつてのに……………」

久「どうでもいい。さっさと本題に入れ」

銀「神は死んだ……………ボケてるだけでまだ元気だけど」

銀崎飛竜 専用機紹介

名称：『きはがみ牙神』

世代：第3世代

系統：近・中距離タイプ、4脚型

製造元：シュライ・キサラギ社（日本）

操縦者：銀崎飛竜

スペック S～F

火力 S

装甲 A

機動力 C

飛行速度 D

エネルギー効率 B

射程 B

操縦難易度 S

シールドエネルギー総量 900

『ISは人型である』という固定概念を捨て、獣の形状を模した最初の機体。紫のカラーリングが施された、狼のような外見をしている。現行ISの中で最も巨大、4メートル近い体躯を持つ。手動ではなくイメージ・インターフェイスによる精神操作により動かし、その操縦難易度は極めて高い。又、大きさと形状からISの中では機動力にも欠けるが、その分より大型の武装を複数装備可能、4脚による射撃姿勢の安定などメリットも大きく、飛び抜けた火力を誇る。背面装甲から操縦者を露出させ、狙撃をする事も可能。

待機状態は紫のブレスレット。

武装

肩面装備 200mmレールガン×2

高周波振動クロー×4

頭部口腔内装備12連装グレネードランチャー

尾型プラズマブレード

側面装備45mmガトリングガン片面6門×2

腹部装備5連装中型誘導ミサイル

緊急用衝撃波発生装置『エスケープ』

65口径スナイパーライフル『ノブナガ』

3連装ロケットランチャー『ユキムラ』

銀崎飛竜 専用機紹介（後書き）

銀「ま、見た目的にはMGS4のクライング・ウルフが使ってた奴みたいな感じだ」

久「馬鹿のような火力だな……それに殆どが装甲にくっついてる形か」

銀「滅茶苦茶強いぜ！ 小回り利かないし実弾装備ばっかだから、ラウラの停止結果とは相性最悪だけだな！」

久「IS自体がイメージ・インターフェイスにより操作される……こんなものがよく扱えたものだ」

銀「凄いつしょ！？ なんかIS適性がSじゃないとまともに動かせないらしいけど」

久「……むやみに性能だけを追求したバカが、後先考えずに弄ったんだろうよ」

銀「使い難いのなんのつて。火力すげえけど」

木々に彩られた邂逅

「……………」

怒り狂う幼馴染からの逃亡を図った楯無は、人目を気にしつつある場所に向かっていた。

そこは誰も知らない、彼女だけの秘密の場所。

去年の終わり頃にこっそりと作った、憩いの場であった。

楯無がこのIS学園の生徒会長に就任したのは、1年の中頃。

それは対暗部用暗部組織、『更識』の17代目当主である彼女にとつて、生徒会長に与えられる数々の権限がとても便利なものだったからだ。

元々快楽主義者のな一面もあり、日々を楽しむ為にその権限をちよつとだけ悪用する事もあれど、基本的には『更識』として『生徒会長』として、その権力^{チカラ}を使う。

そんな特異な彼女には、気付けば『1人の時間』というものが無くなっていた。

……別段、孤独が好きな訳では無い。

けれどもどうしても1人で居たい時ぐらい、彼女にだってある。

寮は相部屋だし、どこに居ようと人目につく。

生徒会長とは、IS学園で『最強』の称号。それを欲して襲いかかつてる生徒も少なくない。

故に楯無は考えた。

ならば1人になれる場所を作ろうと。

学園の敷地内をくまなく探し、木々に囲まれた空き地を見付けた。そして夜中にこっそり備品のベンチをひとつ頂戴し、その場所に

運んだ。

以来そこは、楯無だけの場所になった。

疲れた時、眠い時、のんびりしたい時。

そして――泣きたい時。

『更識家当主』でも無く、『生徒会長』でも無く、『更識楯無』でも無く。

かつてあった本当の自分。幾重もの仮面に覆われ守られた、『
×』として。

自分が偽りない自分で居られる、唯一の場所となった。

「ふんふふん」

機嫌良く鼻歌を歌いながら、楯無は歩いて行く。

仮面を捨てられる、その場所へ。

歩く事、十数分。

林を抜け、開けた空き地へ出る。

「……………え？」

足を止め、見えたものに楯無は目を丸くした。

空き地の中央に置かれたベンチ。

そこには、居る筈の無い自分以外の人間が居たのだから。

「……………」

異様なまでに長い、どす黒い赤髪。

不健康そうな青白い肌、相反する黒の瞳。

右目の下には、特徴的な赤い蛇の刺青。

身長は一見やや低く見えるが、よく見れば組まれた脚が長い。座高が低いだけで、実際には175センチくらいあるだろう。

そんな特徴的な容姿をした、黒と白の逆転した学生服を着こんだ男子生徒が、ベンチに座って本を読んでいた。

「……………」

ふっと、彼の顔が上がる。

その暗い双眸が、ゆつくりと楯無に向けられた。

重ねた仮面の奥底に、自分を仕舞い込んだ少女。
人を遠ざけ、己を夜闇で包み隠した青年。

水の少女と赤い蚣の、最初の邂逅。

過去の片鱗

昼寝をした後、暇潰しに本を読んでいたら、人の気配を感じた。

顔を上げてみれば、ぼやけた視界の先に女が1人。

……さて、あの水色の髪。何処かで見た事があるような……？

「……………」

「……………」

向こうはこちらを凝視している。

何故ここに俺が居るのか、そんな類の視線だ。

大方こいつが此処の利用者、と言っかここを作った張本人か？

1人になりたい時には、この上ない立地だからな。

「……………」

しかし気になる、あの髪の色。

水色なんてそうそう居るものじゃないし、よく見れば眼も赤い。

……そして、丁度あれと同じ色合いをした女を、俺はたった1人だけ知っている。

「……………」

まあいい。今はそんな事はいい。

取り合えず目の前に居るこの女は、容姿こそ似ているが『あいつ』じゃ無い。

そして見たところ、カタギの人間でもなさそうだ。

立ち居振る舞いに、不自然過ぎるほど隙が無い。

……どうせ退屈してたし、試してみるか。

「……………っ！」

「クク」

ああ、ビンゴだ。

試しに懐へ手を伸ばしてみれば、一瞬だが構えを取ろうとした。

この女が平常時だったらこれくらい冷静に対応しただろうが、どうにも少しばかり戸惑っていたようで、簡単に引き出せた。

間違いない。こいつは裏の人間だ。

「まあ、こんな物騒な施設だ。裏の人間^{てめえ}みたいなのが居たところで驚きはしないがな」

「……なんのことかしら」

しらばっくれるか。当然だな。

だがその反応は、イエスって言ってるようなもんだぞ？

「貴方、転入生の久々津君よね？　ここを見付けたのは驚きだけど、こんなところで何してるの？」

「御明答、見付けたのはたまたま。何してるかなんて、見りゃわかるだろ？　読書だ」

「……………」

あからさまに警戒してるな。

さてどうするか。正直言葉を選んで話すのは疲れるんだが、それでいい誤解でもされたら面倒だ。

生身の戦闘じゃあ人間相手に負ける方が難しいが、だるい。

こいつ、それなりに出来そうだし。

「怖い怖い、何を警戒してるんだか。別に俺は何か企んでる訳でもお前をどうこうする気も無いんだぞ？ 蚣は確かに攻撃的だが、手を出さなければ噛まない」

「……………」

めんどくせえな、警戒解けよ。

豆知識まで教えてやったのに。

「最悪、だな。ただ読書に勤しんでただけだったのに、そう怪しまれるとか」

「貴方には不明な点多すぎるのよ。名前さえ本名かどうか分から

ない人間を、信用できると思う?。」

「チツ」

……かつたるい。

そもそもこいつに根掘り葉掘り聞かれる筋合いも無ければ、それに答える義理も無い。

一瞬だけこの女にかつての『仲間』を幻視して、少しだけ相手になってやろうかなど考えたのがどうかしてた。

本当にどうかしてた。こいつを――

「^{アゲハ}揚羽と重なるなんてな……」

「……………え?」

「?」

……どうしたってんだ。

揚羽の名前を出したら、驚いたように目を見開きやがった。

「……………今……揚羽って……」

「……気安く俺の仲間の名を口にするな。それがどうした」

「なか、ま……？　あなた……貴方、お母さんを……知って……るの……？」

「……お母さん？」

何と。こいつは凄い偶然だ。

確かに揚羽は、俺達『5人』の中で唯一『外部』から連れられてきた人間だった。

これ位のガキが居るには、若過ぎる年齢だったが……おかしくは無い。

「……世界は狭いな」

「……教えて！　お母さんは今どこ？　どこに居るの！？」

「ふん……お断りだ」

誰がどこの馬の骨とも知れない輩……ああいや、揚羽のガキか。

だが揚羽の実子だってんなら、尚更に。

……教えてやる訳には、行かない。

「俺は、帰らせて貰う。……夕食の時間だ」

「待ちなさい！」

……………あ？

この女、誰に掴み掛かって来てんだ？

蛭は手を出せば噛み付くって、さっき言ったよな？

「きゃ、あつ！！」

「ツと……やべ」

不用意な事するから、思わず首に手刀を叩き込んだ。しまった。

咄嗟に加減はしたが……これはしばらく起きないだろう。

取り合えず、ベンチに寝かせておくか。

「……………チッ」

……………揚羽の、娘。

こいつが真実を知れば、どんな顔をするのやら。

知らない方がいい。

知れば……どうなるか分からない。

「最悪、だな……」

……またひとつ、厄介な事になった。

月光に染まる赤

「……………っ！」

……鈍痛を残す首を押さえながら、私は夜の闇を歩く。

目指す場所は、学生寮。

この網膜にその姿を焼き付けた『彼』と、今日もう1度会う為に。

「……………」

私の母、16代目『楯無』こと更識揚羽は、12年前の秋、任務中に行方不明になった。

更識家は、当然総力を挙げてお母さんを探した。

けれど手掛かりの欠片さえも掴めず、時間だけが無闇に過ぎた。

そんな折に突如現れた最強の兵器、インフィニット・ストラトス。

世界各国が荒れ、その水面下で更識家も大きく動いた。

……お母さんの搜索をしている暇なんか、無いくらいに。

「やっと……」

私は脇目も振らずに鍛錬に明け暮れた。

一刻も早く『楯無』を継いで、お母さんを探す為に。

大好きだったお母さんが、このまま居なくなってしまうのが嫌だったから。

妹の簪ちゃんなんか、お母さんの顔さえ満足に覚えていないのに！

「やっと見付けた、お母さんへの手掛かり……！」

お母さんを仲間と言った彼、久々津・オテサーネク。

彼が転入して来る際にそのデータを調べ、結局何ひとつ確かな事が分からなかった不透明な存在。

だけど今は、もうそんな事どうでもいい。

「逃がさない……絶対に」

厳しいところもあったけど、本当は誰よりも優しくて。

そして誰よりも強かったお母さん。

今もまだ、絶対にどこかで生きている。

……だから。

「……………」

彼がお母さんの事を知っているのなら！

例えどんな事をしてでも、居場所を聞き出してみせる！

「首を洗って、待ってなさい……！」

学生寮の屋上で、久々津は1人空を見上げていた。

黒天に浮かんでいる、零れ落ちて来そうなぐらい大きな満月。

それを見据えながら、持っていた炭酸飲料の缶をひと口、ぐいと呷る。

「……………」

彼の無機質な瞳は、いつもと違いどこか優しくて悲しげだった。

小さく吹いたそよ風が、乾いた髪をぱらぱらと散らす。

「…………揚羽。お前とは、良くこうして月を見たよな」

酒に弱いくせに月見酒と称して何杯も飲んで、倒れた拳句2日酔いで使い物にならなくなる。

そしてそれを『蛇』や『蜘蛛』に怒られつつも、懲りずに繰り返す。

……そんな馬鹿を、2人でしょっちゅうやった。

思えば『仲間』の中で出会ったのは1番最後だったが、絆は1番

深かった。

久々津にとって揚羽は、特別だった。

「お前の娘に会ったよ、揚羽……てかお前、ガキ居たのか。知らなかったぜ」

当然だけどな……と続け、更にひと口ジュースを呷る。

揚羽に娘が居た事は、久々津にとっても初耳。

否、恐らくは久々津の知る揚羽も、自身に娘が居たなど露とも思っていないかっただろう。

何せ彼らが出会った時、揚羽は記憶を失っていたのだから。

「お前の居場所は教えなかった……悪いな、感動の親子再会をさせてやれなくて」

ふっと久々津は月から目を逸らし、項垂れる様に下を向く。

その姿はまるで、懺悔をしている咎人のようだった。

「……なあ、揚羽——」

彼は言葉を最後まで紡ぐ事無く、後ろを振り返る。

開け放たれた屋上の扉。

そして久々津を射抜くような視線で見据^めえる、水色の髪の少女。

「よう、早かったじゃねえか」

更識楯無が、そこに居た。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4776z/>

ただ、それだけを知りたい

2011年12月23日23時54分発行